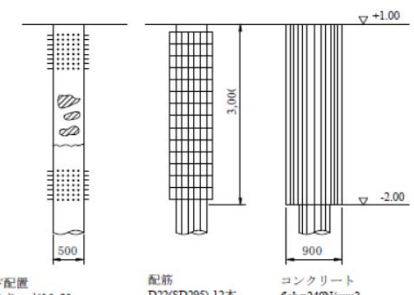
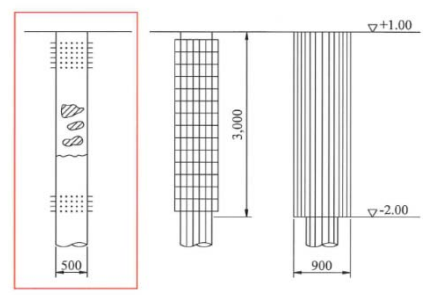
※湾鋼構造物　防食・補修マニュアル(2009年版)は、平成26年8月に第3刷を発行しております。
第2版発行（平成24年10月）の当該マニュアルをお持ちの方は、正誤表②に訂正しておりますので、ご留意ください。

湾鋼構造物　防食・補修マニュアル(2009年版) 正誤表②　［第3版発行（平成26年8月）時に、第2版発行（平成24年10月）内容の修正点］

ページ	行など	訂正	
		誤	正
p.49	3行目	一般には1～7A/m^{2}程度で4～10ヶ月程度必要となる（厚膜被覆方式）	一般には1～7A/m^{2}程度で4～10ヶ月程度の通電が必要となる
158	写真-4.3.1	FRPカバー材を用いた	FRPカバーを用いた
159	表-4.3.1 1行目	ガラス繊維で補強された熱硬化性の不飽和ポリエステル樹脂を使用している	耐食性、耐久性に優れているイソ系不飽和ポリエステル樹脂とガラス繊維との複合材で
161	27,28行目	変形を防止するための十分な支保工を設置することが大切である。	変形を防止するための十分な支保工や取付金具を設置することが大切である。
162	図-4.3.3	樹脂製カバーの例	FRPカバーの例
201	表-2.3.1	目視調査-日常点検の○ズレ	目視調査-日常点検の○ズレなおし
252	8,9行目	構造物の供用期間にわたって水中硬化形被覆の防食性能を確実に維持することを目的としている	構造物の供用期間にわたってモルタル被覆の防食性能を確実に維持することを目的としている
252	15,16行目	モルタル被覆では、その表面がFRPあるいは二次製品によって覆われているため、	モルタル被覆では、その表面が残置するカバー材によって覆われているため、
301	式（2.2.5） 式（2.2.6）	$Q_{yd}=\left(31A_{ss}\sqrt{\left(h_{ss}/d_{ss}\right)f'_{cd}}-22000\right)/\gamma_b$ $Q_{yd}=0.7A_{ss}f_{sy}$	$Q_{yd}=\left\{31A_{ss}\sqrt{(h_{ss}/d_{ss})f'_{cd}}+10000\right\}/\gamma_b$ $Q_{yd}=A_{ss}f_{ssud}/\gamma_b$
302	式（2.2.5） 式（2.2.6） 凡例	f_{sy}　：0.2永久ひずみ時のスタッドの引っ張り応力度（N/mm^2） ~~JISB1198:1995頭付きスタッドで規定されているスタッドの場合は350N/mm^{2}としてよい~~	f_{ssud}　：スタッドの引張強度の設計用値（N/mm^2）
332	5）	（社）土木学会：構造工学シリーズ11,複合構造物の性能照査指針,2002.10	（社）土木学会：複合構造標準示方書，2009.12
付4-17		スタッドの本数 n_{st} は，次式により求める． $\gamma_a\left(\frac{N_d}{n_{st}}+\frac{M_d}{0.5n_{st}r_p}\right)<Q_{yd}$ $n_{st}=\gamma_a(N_d+2M_d/r_p)/Q_{yd}$ ここに， N_d ：軸力の設計用値 M_d ：曲げモーメントの設計用値 γ_p ：鋼管杭の外縁半径　0.25 (m) γ_a ：構造解析係数　1.00 Q_{yd} ：スタッド１本当たりの設計せん断耐力　35.6 (kN/本) （次式により求められる小さい方の値を用いる．） $Q_{yd}=\left(31A_{ss}\sqrt{\left(h_{ss}/d_{ss}\right)f'_{cd}}-22000\right)/\gamma_b$　=　35,599 (N)　･･･採用値 $Q_{yd}=0.7A_{ss}f_{sy}$　=　49,260(N) A_s ：スタッドの断面積　201.1 (mm^2) d_s ：スタッドの軸径　16.0 (mm) h_s ：スタッドの高さ　80.0 (mm) f'_{cd} ：コンクリートの圧縮強度の設計用値　24 (N/mm^2) （ここでは γ_c=1.0 として圧縮強度の設計用値を求めてよい．） f_{sy} ：0.2%永久ひずみ時のスタッドの引張応力　350 (N/mm^2) （JIS B 1198「頭付きスタッド」で規定されたスタッドの場合，350N/mm^2 としてよい．） γ_b ：部材係数　一般に 1.3 としてよい．	スタッドの本数 n_{st} は，次式により求める． $\gamma_a\left(\frac{N_d}{n_{st}}+\frac{M_d}{0.5n_{st}r_p}\right)<Q_{yd}$ $n_{st}=\gamma_a(N_d+2M_d/r_p)/Q_{yd}$ ここに， N_d ：軸力の設計用値 M_d ：曲げモーメントの設計用値 r_p ：鋼管杭の外縁半径　0.25 (m) γ_a ：構造解析係数　1.00 Q_{yd} ：スタッド１本当たりの設計せん断耐力　60.2 (kN/本) （次式により求められる小さい方の値を用いる．） $Q_{yd}=\left\{31A_{ss}\sqrt{(h_{ss}/d_{ss})f'_{cd}}+10000\right\}/\gamma_b$　=　60,214 (N)　･･･採用値 $Q_{yd}=A_{ss}f_{ssud}/\gamma_b$　=　61,865 (N) A_{ss} ：スタッドの断面積　201.1 (mm^2) d_{ss} ：スタッドの軸径　16.0 (mm) h_{ss} ：スタッドの高さ　80.0 (mm) f'_{cd} ：コンクリートの圧縮強度の設計用値　24 (N/mm^2) （ここでは γ_c=1.0 として圧縮強度の設計用値を求めてよい．） f_{ssud} ：スタッドの引張強度の設計用値　400 (N/mm^2) （ここでは JIS B 1198「頭付きスタッド」規定の引張強度 400～550N/mm^2 の下限値を特性値として，材料係数 γ_s=1.0 で除して算定．） γ_b ：部材係数　一般に 1.3 としてよい．
付4-18		（２）スタッド本数の算定 １）上部スタッド本数 n_{st1} $n_{st1}=\gamma_a(N_d+2M_d/r_p)/Q_{yd}$ = 1.00×(376.84＋2×435.24/0.25)/35.6 = 109 (本) → 8 段×14 本/段 = 112 (本) ここに， N_d ：軸力の設計用値　376.84 (kN) M_d ：曲げモーメントの設計用値　435.24 (kN･m) γ_p ：鋼管杭の外縁半径　0.25 (m) γ_a ：構造解析係数　1.00 Q_{yd} ：スタッド１本当たりの設計せん断耐力　35.6 (kN/本) ２）下部スタッド本数 n_{st2} $n_{st2}=\gamma_a(N_d+2M_d/r_p)/Q_{yd}$ = 1.00×(376.84＋2×284.55/0.25)/35.6 = 75 (本) → 7 段×11 本/段 = 77 (本) ここに， N_d ：軸力の設計用値　376.84 (kN) M_d ：曲げモーメントの設計用値　284.55 (kN･m) γ_p ：鋼管杭の外縁半径　0.25 (m) γ_a ：構造解析係数　1.00 Q_{yd} ：スタッド１本当たりの設計せん断耐力　35.6 (kN/本)	（２）スタッド本数の算定 １）上部スタッド本数 n_{st1} $n_{st1}=\gamma_a(N_d+2M_d/r_p)/Q_{yd}$ = 1.00×(376.84＋2×435.24/0.25)/60.2 = 65 (本) → 6 段×11 本/段 = 66 (本) ここに， N_d ：軸力の設計用値　376.84 (kN) M_d ：曲げモーメントの設計用値　435.24 (kN･m) γ_p ：鋼管杭の外縁半径　0.25 (m) γ_a ：構造解析係数　1.00 Q_{yd} ：スタッド１本当たりの設計せん断耐力　60.2 (kN/本) ２）下部スタッド本数 n_{st2} $n_{st2}=\gamma_a(N_d+2M_d/r_p)/Q_{yd}$ = 1.00×(376.84＋2×284.55/0.25)/60.2 = 45 (本) → 4 段×12 本/段 = 48 (本) ここに， N_d ：軸力の設計用値　376.84 (kN) M_d ：曲げモーメントの設計用値　284.55 (kN･m) γ_p ：鋼管杭の外縁半径　0.25 (m) γ_a ：構造解析係数　1.00 Q_{yd} ：スタッド１本当たりの設計せん断耐力　60.2 (kN/本)
付4-19	図-1.20	３）スタッドと鉄筋コンクリート部材の位置  スタッド配置 頭付きスタッド16×80 上部：112本 下部：77本 配筋 D22(SD295)-12本 D13(SD295)-15本 コンクリート f'ck=240N/mm2 W/C≦50% 被覆厚20cm	３）スタッドと鉄筋コンクリート部材の位置  スタッド配置 頭付きスタッド 16×80 上部： 66 本 下部： 48 本 配筋 D22(SD295)－12 本 D13(SD295)－15 本 コンクリート f'_{ck}=24N/mm^2 W/C≦50% 被覆厚 20cm
付5-10	工法の特徴	防食効果のある皮膜…できる．ただし，この皮膜	防食効果のある被膜…できる．ただし，この被膜